

二国間交流事業 セミナー報告書

令和4年9月30日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]

京都大学・人文科学研究所

[職・氏名]

教授・稲本泰生

[課題番号]

220213601

1. 事業名 相手国: ドイツ (振興会対応機関: DFG) とのセミナー

2. セミナー名

(和文) 美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容

(英文) Transformation of Invisible Entities of Traditional East Asia, as seen from Art Historical and Archaeological Perspectives

3. 開催期間 2022年8月25日 ～ 2022年8月28日 (4 日間)

4. 開催地(都市名)

ヴェルツブルク、ケルン

5. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

University of Wuerzburg, Lektor (Senior Lecturer), SOTOMURA Ataru

6. 委託費総額(返還額を除く) 2,317,276 円

7. セミナー参加者数(代表者を含む)

	参加者数	うち、本委託費で渡航費または 日本滞在費を負担した場合*
日本側参加者等	8 名	8 名
相手国側参加者等	20 名	0 名

参加者リスト(様式B2)の合計人数を記入してください。該当がない箇所は「0」または「-」を記入してください。

* 日本開催の場合は相手国側参加者等の日本での滞在費等を負担した場合、相手国開催の場合は日本側参加者等の渡航費を委託費で負担した場合に記入してください。

8. セミナーの概要・成果等

- (1) セミナー概要(セミナーの目的・実施状況。第三国からの参加者(基調・招待講演者等)が含まれる場合はその役割とセミナーへの効果を記載してください。関連行事(レセプション、見学(エクスカーション)その他会合(別経費の場合はその旨を明記。))などがあれば、それも記載してください。各費目における増減が委託費総額の50%に相当する額を超える変更があった場合には、その変更理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。)

本セミナーは、日独両国の若手・中堅の研究者が一堂に会し、伝統東アジアの文物と芸術を解釈するための共通の基盤を作ることを目的に企画され、2022年8月25～28日の四日間にわたって開催された。

日本側メンバー八名は8月24日にヴュルツブルク入りし、セミナー初日の25日にはまず午前中にマリエンベルク要塞内のフランケン博物館を訪問、当該地域のキリスト教美術の実作品を前に、同館学芸員のファン・デア・ヴァル氏から東アジアと西欧の宗教美術における共通項に関してレクチャーを受け、意見交換を行った。夕刻にはレジデント内にあるヴュルツブルク大学のマルティン・フォン・ヴァーグナー博物館にて開会セレモニーが行われ、日独両国の代表者である外村中と稲本泰生による趣旨説明、同学副学長・フィッシャー氏の挨拶、同館考古館館長・グリースバッハ氏によるコレクション紹介、前・ハイデルベルク大学教授のレダローゼ氏による基調講演があった。続いてレセプション(ドイツ側負担)が開催され、参加者が懇談して相互交流を深めた。

8月26・27日の両日には、ヴュルツブルク大学構内の教室を会場として本セミナーの中核をなす六つのセッションを実施し、活発な意見の応酬がなされた。各日三本、計六本の研究発表を日本側メンバーが行い、それに対するコメントを専門分野の近いドイツ側メンバーが行ったのち、全体で討論する形式をとった。言語の面では、高度に専門的な内容を正確に伝え、より深い相互理解に到達すべく、共通語(英語など)ではなく各人の母国語を話すという方式を、実験的に採用した。また本セミナーにおいて中国の文物・思想が占めるウエイトの大きさに鑑み、日独間の通訳のみでなく、当該部分の専門家である中国人(魏藝氏)とドイツ人(シュパー氏)が日⇄中、中⇄独を各々担当する二段階通訳を通して、万全を期した。なお開催に先立つ25日朝、日本側メンバーは同大学のレントゲン記念館を訪問・参観した。

最終日の28日はケルンに移動し、東洋美術館を訪問した。第三セッションのコメンテーターを務めた同館副館長・レッシュ氏の案内で収蔵庫に入り、同氏からコレクションに関するレクチャーを受けた。また中国・日本の文化財多数を実見調査して情報並びに意見交換を行い、全日程を終えた。

計画当初はJSPSの助成金の範囲内で旅費八名分の総額を捻出できる見込みであったが、コロナ禍による航空運賃の高騰によって不可能であることが判明した。オンライン開催ないし対面・オンラインのハイブリッドによる開催を余儀なくされる可能性が高かったが、ドイツ側代表者の尽力によって、DFGから三名分の助成金(ただし滞在費の一部、日当、PCR検査代はJSPSの負担)を得ることができ、航空券をJSPS助成金で購入した五名と併せて八名全員の渡航が実現した。

(2) 学術的価値（セミナーにより得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果）

京都大学人文科学研究所は、文部科学大臣の認可を受けて 2010 年度（平成 22 年度）より全国共同利用・共同研究拠点「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」としての活動を開始した。その活動の一環として、代表者は外村氏とともに 2019 ～21 年度の三年間、共同研究プロジェクト『「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究』を組織運営した。本セミナーは、上記プロジェクトとも深く関係するテーマ（美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容）を掲げている。報告者はいずれも同プロジェクトに参加する優秀な若手・中堅の研究者であり、各セッションで注力した課題は、より具体的に言えば、「あるいは「見える」ものなのかもしれないが、普通であれば「見えない」ものとされる「仏」「道」「太極」「神」などに関連する作品ないし資料群の構造理解」と要約できよう。

当日は、当該分野における根本的課題にも関わらず総合的な研究がなされているとはいえないこの課題について、美術史学及び考古学の研究成果を中心に据え、哲学、宗教、歴史など、様々な分野の研究の成果や手法を援用しながら、具体的な事例に即して解釈のモデルが提示された。取り上げられた対象は、墳墓の遺構と遺物、仏教・神道の彫刻と絵画、太極図、中国の文人関係の絵画などである。それぞれの領域における最新情報と自らの探究過程が示され、専門の近いドイツ側研究者との対論が行われたことで、個々の探究は大幅に深化し、精度も向上した。こうした議論を通して参加者全体の共通認識が国際レベルで形成され、今後の分野横断的な統合に向けた研究の方向性がより鮮明化したことが、本セミナーにおける最大の学術的成果といえる。

(3) 相手国との交流（両国の研究者が協力してセミナーを開催することによって得られた成果）

本セミナーは当初、2021 年 12 月の開催を予定していたが、コロナ禍の長期化のため延期され、2022 年 8 月に実施された。セミナーは構想段階から将来の学界を担う日独の若手・中堅研究者たちによる国際的なネットワークの構築を眼目に掲げており、長期的で実りある交流の基盤形成には対面式での開催が不可欠であるという考えのもと、web 開催では代替できないという立場を取ってきた。幸い JSPS の理解を得て予算が次年度に繰り越され、対面開催が実現したことで、セッションでは白熱した議論が展開された。早い段階でメンバーから発表概要が示され、独訳を経て事前に問題点が共有されていたこともあって、また高度に専門的な議論にたえる通訳の体制がとられていたため、双方の論点理解はスムーズに行われ、効率的な意見交換が可能となった。

両国メンバー間の距離が縮まり、当該分野における日本側の研究が、今後関係を継続するに値する水準を備えていることがドイツで認知・共有された点は、本セミナー開催がもたらした最大の成果の一つである。終了直後の 2022 年 9 月中旬の時点で、すでにドイツ側メンバーのうち一名（シュパー氏）が来日して京都大学を訪問しており、渡独したメンバーの仲介で同分野の教員から研究面での助言を受けるなど、セミナーを踏まえた交流は、早くも顕在化している。

(4) 社会的貢献（社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか）

本セミナーは元来、日本の外務省公認の 2021 年度独日交流 160 周年記念行事の一つと位置づけられ、在ベルリン日本大使館のウェブサイトにも紹介されていた。コロナ禍で延期となったため記念行事ではなくなったものの、国際レベルで高水準なものとして日独が誇れる学術交流が、自然科学系分野のみではないことを証明するという目標は十分に達成されたといえる。東洋学研究の世界的拠点である京都大学人文科学研究所の活動と実績がドイツで広くアピールされ、京都大学・ヴュルツブルク大学を窓口とした東洋学研究を介する交流の端緒を開く機会になった事実が示すように、日本の大学における人文科学研究の存在感と国際的な影響力・発信力が海外で可視化される場として機能した点において、本セミナーの社会的貢献は顕著である。

また 8 月 28 日にケルン東洋美術館で行った研究交流に際し、中国・日本の仏像彫刻や像内納入品、中国の考古遺物など、同館収蔵品を前に意見交換できたことも意義深い。今回の日本側メンバーには博物館の OB ないし現役学芸員が計三名おり、即物的な知見に基づく有益な情報を、ドイツ側に提供することができた。東アジアの文化財を介した日独交流を、狭義の人文科学研究の枠内におさまらない、より直接的に社会と結びつく分野（例：展示活動や保存修復など）と関連づけつつ前に進めた点においても、本セミナーは貢献を果たしたといえる。

(5) 若手研究者養成への貢献（若手研究者養成への取組、成果）

今回のセミナーにおける日本側の報告者はいずれも若手・中堅の研究者であり、発表の準備を通して、個々の専門領域における研究のさらなるレベルアップが図られた。今回、国際的な場で自身の研究を披露し、手応えを得たことで、メンバーは大きな自信を得たといえる。各発表に対するコメントもドイツ側の若手・中堅研究者が担当したため、世代の近い研究者が互いに刺激を与えることで双方の研究が深化する、という好循環が生み出された。

日本側メンバーにとって、討論を通して欧州の研究者ならではの着眼点と探究方法に接することができた点も有益であった。特にレダローゼ氏（前・ハイデルベルク大学教授）との交流がもたらした教育効果は大きい。氏は長年にわたり東洋美術研究を牽引し続けてきた世界的権威であり、セッションに先立ち基調講演を行われたのみならず、全てのセッションに同席され、発表者はいずれも直接、的確な助言を受けることができた。この経験は各人の意欲を強く刺激し、今後の研究に指針を与える財産となるであろう。

このほか地域の文化財を紹介・陳列する博物館、大学付属の博物館・記念館、そして欧州有数の東洋美術館といったタイプの違う展示施設を（一部はバックヤードを含めて）参観し、レクチャーを受けたことも、若手メンバー（博物館関係者、学芸員課程担当者を含む）にとって、大学における文物の活用のあり方、文物の展示・研究における日独の現場事情の相違などについて認識を深める、貴重な経験となった。

(6) 将来発展可能性（本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか）

本セミナーの端緒となったのは、京都大学人文科学研究所で日独代表者が協力して運営してきた共同研究プロジェクト『「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究』（2019～21年度）の活動である。今回の日本側メンバーは八名全員がこのプロジェクトのメンバーであり、共同研究の成果報告書を兼ねた論集『「見える」ものや「見えない」ものをあらかわすー東アジアの思想・文物・芸術』（外村中・稲本泰生編。2023年度出版予定）の執筆者でもある。論集掲載予定の論考には、本セミナーの発表原稿を、討論を経てブラッシュアップしたものが複数含まれている。今回形成された当該領域における若手・中堅研究者のネットワークがさらに強化され、国内の共同研究での発表⇒国際的なセミナーでの発表と討論⇒成果物の刊行、というモデルに近い研究サイクルが今後も維持されるならば、将来的には京都大学人文科学研究所とヴェルツブルク大学漢学系を窓口とした相互往来（各種助成による短期・長期滞在）による研究交流や、人文研における新たな共同研究プロジェクトの企画運営などへの発展が期待される。このネットワークやサイクルが、学術的な生産性に富んだ東洋学研究の基盤の一つとして、特に文物研究の領域で重要な役割を果たす可能性は小さくない。

また今回訪問したケルン東洋美術館では、同館が収蔵する中国・日本の重要な文化財（考古遺物及び美術作品）に対する今後の再調査について打診したところ、好感触を得ており、同館学芸員と協力して行う即物的研究を組み込んだ、より精度の高い文物研究に展開する可能性がある。欧州における美術館・博物館ネットワークにおいて重要な位置を占める同館との交流は、日本側代表者が研究代表者を務める科研プロジェクト「五台山仏教文化圏における文物の形成・継承・波及」（基盤研究A、2021～2025年度）中で計画されている、欧州における文化財調査の実施などに際しても、好影響を及ぼすことが期待される。

(7) その他（上記(2)～(6)以外に得られた成果（論文発表等含む）があれば記載してください）

上記(6)で言及した論集『「見える」ものや「見えない」ものをあらかわすー東アジアの思想・文物・芸術』（2023年度出版予定）掲載予定の論考のうち、以下の三篇が、本セミナーの報告内容をベースにしている。

向井佑介「漢魏晋墓の神坐と墓主図像 ―墓の中の「見えるもの」と「見えないもの」―

内記理「仏像の出現時期」

呉孟晋「書斎図と雅集図にみる中国文人の清玩：みえない古代を想像する」